



ち え の わ

Vol. 20

## 義太夫三味線の噺

会員 若林 擴

女義太夫人間国宝に竹本駒之助師匠がいる。その相三味線を弾く鶴沢津賀寿師匠が私の義太夫三味線の師匠である。

太棹の三味線には、津軽三味線と義太夫三味線がある。江戸時代、松前舟によって関西から東北地方に運ばれた、使い古しの義太夫三味線が津軽三味線になったと言われている。今では津軽三味線は風土に合わせて大音響を出すために、胴も大きく、棹も太くなり、義太夫三味線より一回り重く大きくなった。

義太夫三味線の駒には鉛が仕込まれている。撥は象牙で出来ており、頭部の開きの狭い、分厚く重いもので、糸に直接接触する撥先の耳の部分は消耗が激しいので取替え可能にしてある。プラスチックの撥にはそんな仕掛けは無い。

ちなみに中棹の三味線には小唄、地唄、新内、常盤津、清元がある。長唄は細棹の三味線である。それぞれの音色の相違は、棹の太さより、胴の大きさと糸、撥、駒によることが大きい。

細棹と中棹の三味線用の撥は、撥先が開いて厚みが薄い尖った撥の両耳で繊細な演奏技法が可能となるのに対し、太棹の義太夫の撥は、強く叩くために、箱型で分厚く、撥先の開きが少なく、丈夫に出来ている。それでも結構器用に色々な擬音を出すことが出来る。重厚な伴奏のサウンドが太夫の浄瑠璃と相俟って人々の心にずしりと響く。同じ太棹でも津軽三味線の撥は義太夫の撥と全く異なり、細棹、中棹と同じような型の撥を一回り小さくした形状である。

浄瑠璃の名称は、もともと、琵琶法師が琵琶を弾いて、語った「浄瑠璃姫十二段草紙」の節回しが良く歓迎され、浄瑠璃姫の物語以外の出し物を語っても、その節回しを浄瑠璃節と呼ぶようになった。永禄年間、琉球から蛇の皮を張った三弦が伝来し、それを改良して猫の皮を張った三味線が出来ると、これを伴奏楽器

として用いた琵琶法師が三弦の引き爪(ピック)を「撥」に持ち代えて使ったので、細かい演奏技法が可能となり、浄瑠璃のみでなく三味線音楽は大いに発展した。

日本の伝統音楽の伝承は、耳から耳へ、手から手へと体で覚えるより方法が無かった。義太夫も同じで、松屋清七が三味線の勘所(ツボ)を、いろは48文字で表わし、これを朱墨で本に書き入れたことで、義太夫三味線の譜が後世に伝わった。しかしながら現在でも一般的な稽古では、師匠の勘所を押さえている指の動きや口譜(口三味線)を聞き覚えて稽古している。

関西で浄瑠璃と言えば、義太夫節のことである。関東では一中節、河東節、常盤津節、新内節、清元節も浄瑠璃節である。浄瑠璃は関西から始まったので浄瑠璃を語るには関西弁でなければならない。従って関東、東北の間は浄瑠璃を語る際に、イントネーションに気を付けなければならない。

細棹、中棹三味線から太棹の津軽三味線までは共通して撥を立てて弾くことが出来るが、同じ太棹でも義太夫三味線の奏法は全く異なる。先ず撥の握りの厚みが大きくて小指と薬指の間に収まらないのに、それでも敢えて撥を挟んで寝かせ、親指と人差し指で分厚い撥先の開きを保持し、絃に力いっぱい押し付け、渾身の力を込めて叩かなくてはならない。

1匁から4匁の鉛を両端に仕込んだ義太夫三味線の駒の高さは5分5厘であり、細棹、中棹の三味線の駒の倍の高さである。三本の糸は細棹、中棹三味線の駒の倍の高さに張り渡されている。勘所を左人差し指爪先で押さえるには、爪を寝かせて必死の力で押さえないと撥皮に届く前に跳ね返され、音が決まらない。

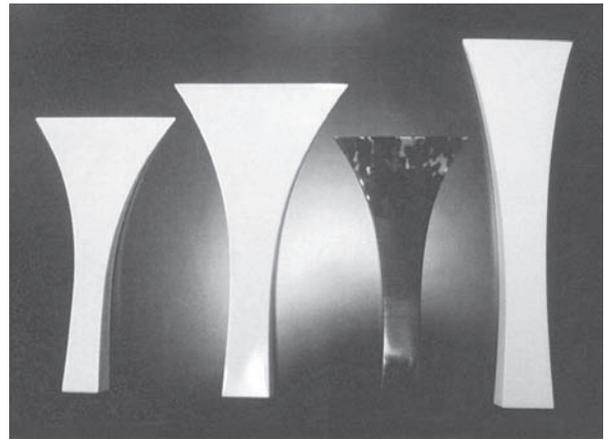
義太夫三味線の胴と棹の接合部は他の細棹や中棹の三味線と全く異なる。棹を挿入する胴の穴は上下に長穴になっていて、胴は棹に対して上下に動かして三味

線弾きの好みの位置に楔で止め調整出来るようになっている。

三味線の棹は昔は花梨か紫檀で作られていた。硬く緻密で比重が高い木が良しとされ、当時一番硬い木は紫檀だった。明治時代に、インドから軽い綿花を大量に積んで来た船が、重し代わりにバラストとして積んで来た紅木（こうき）を、用が済むと大阪港に捨てて帰った。これが沈没材と言って水に沈むくらい重い木で、硬すぎて細工が出来ず、家具にすると割れ、大きな木が少なく、紅木は他に使用価値の無い木材であった。

三味線屋は、紅木が固く水に沈むのを見て、もしかして棹に使えるのではないかと気がついた。紅木は外観柿の木に似て、インドのデカン高原アンドラプラディッシュ州の岩盤層の地層の悪いところで生きる生命力の強い灌木である。デカン高原の荒地に日中の気温が50度、夜は零下に下がる寒暖の差の大きい厳しい条件の場所に水が無くとも育ち、盆栽のように直径が20～30センチになるまでに2、3百年もかかると言われている。年輪が判別できない位に目が詰まって重く、灌木なので密集して生えず、悪い環境でゆっくり育ち、樹高は4～5メートル位にしかならない。樹皮の内側の「しらた」と呼ばれる場所を介して赤い芯を持つ。だから紅木といい、英語名をレッドサンダーウッドと言う。

三味線の棹は、中国では紫檀が喜ばれるが日本では紅木が珍重される。インド政府は日本人が喜ぶ紅木を金の成る木に違いないと考え丸太の輸出を禁止した。そのために、予めインドで製材された木材が輸入されるようになって、合理的な木取りが出来ず無駄が増え紅木の値段が上がった。棹は紫檀の他、タイ、ミャンマー、ラオスの東南アジア産の花梨で、昔は国内産の檜、クワも多く使った。白檀や落語の道具にも出てくる唐木（からき）の鉄刀木（たがやさん）を使うこともあった。



胴は全て細工のし易い花梨だが、昔はクワや檜のものもあった。音の反響を良くするためと称して付加価値を付けるため、昔は高級品には胴の内側を鑿で手彫りして杉綾に彫り込んだ。今は電動ドリルで簡単に彫ることが出来るだけで無く、実際に音が良くなったかどうか判別し難いので、現在は内側を杉綾に彫らない胴が多い。

皮は供給の少ない高価な猫の腹皮よりも、供給の多い丈夫で安価な犬皮を使う津軽三味線の様に、稽古三味線には犬の皮を使うことが多い。猫の皮が高価なのは、雄猫は喧嘩沙汰が多く、皮が傷だらけで使えないとか、雌猫は交尾の際、雄猫に引掻かれて傷が付くので、交尾未経験の雌猫の皮がよいとか、また子供を生んだことの無い雌猫は未だ乳首に穴が開いていないからよいとか、色々言われていたが、実際には交尾前の雌猫の皮は薄いので、傷が治って、ある程度、面の皮が厚くなった、強かな雌猫の皮が望ましいと言われているが、ほんとかなー？

写真の撥は、左から象牙の長唄用、象牙の新内用、黒水牛の握りに鼈甲の撥先が接合してある津軽用、合成樹脂の義太夫の稽古用撥である。

地唄用の撥は新内用の撥で代用できるので写真に写っていないが、地唄用の撥は白い象牙の握りに段差を設けて鼈甲の撥先を接合している。